



伊藤忠遊全集

第三卷

昭和五年一月廿五日印刷
昭和五年一月三十日發行

伊藤痴遊全集 第三卷

著者 伊藤仁太郎

發行者 下中彌三郎

東京市麹町區下六番町一〇

印刷者 濤川 薰

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番

株式會社

平

凡

社

電話九段

三三一

六四六

四七六

七五四

番番番

第三卷 木戸孝允 目次

序	詞(一一三).....	三
櫻田事件	(一一二).....	一四
少壯時代	(一一七).....	五〇
齋藤熟の木戸	(一二八).....	六九
坂下事件	(一二二).....	八
長井雅樂と木戸	(一二五).....	二四
有備館時代	(一二七).....	二九
長井雅樂と急激派	(一二五).....	一四八
對州藩の懷柔	(一一三).....	一六〇
島津久光の上洛	(一一三).....	一六九

生 麥 事 件 (一一六)	二七六
長州藩士の攘夷運動	一九二
吉田松陰と門下生 (一一三)	一九五
將軍家茂の苦境 (一一五)	二〇一
攘夷祈願の行幸 (一一三)	二三三
姉小路卿の遭難 (一一三)	二三〇
長州藩の攘夷建策 (一一五)	二三八
浪士の横行と會津藩 (一一三)	二四二
岩 倉 の 失 脚	二四七
會薩二藩の握手 (一一九)	二四九
七 卿 落 (一一五)	二七三
新 選 組	二八六
今井似幽の家	二八九

幾松の出現(二七)	二九三
伊藤俊輔の取持(二一三)	三二
暗討の失敗(二一二)	三二
池田屋の亂闘(二七)	三六
長州藩議の沸騰(二七)	三六
長門守の入洛(二一五)	三八
蛤御門の戦(二一九)	三八
幾松の氣轉(二一五)	四〇四
桂の出石落(二一五)	四二
幾松の苦心(二一九)	四七
長州征伐の事(二一四)	四六五
勝安房の出身(二一七)	四七五
長藩の謝罪(二一六)	五〇二

長州藩の紛訌(一一四).....	五二七
馬關開港の紛議(一二二).....	五五五

木戸孝允

序

詞

一

大正十五年の事であるが、木戸侯爵家に於て、松菊先生の祭典を、執行するに當り、著者は、その案内を受けて、是非、参列するやうに、との招きに預つた。

然るに、其時は、東京市會議員の總選舉に際し、著者は、三たび候補して、競争の眞最中であつた爲に、折角の案内ではあつたが、其日には、参拜を爲ぬつもりで居た所へ、來原瓊助といふ人が、朝早く、やつて來て、『今日の祭典には、是非とも、御出を願ひ度いが、如何でありますか』

と、いはれたので、

『實は、目下、市會議員の競争中で、殆んど寸暇が無い位であるから、今日は、不参するつもりであるが、特に、貴下が、斯うして、お訪ね下さるといふのは、何ういふ譯ですか』

と、問返した時に、來原氏は、

『故人の履歴に就て、國民一般へ、最も廣く傳へて下さるのは、貴下であるから、木戸家に就ても、それを徳としてひどく喜んで居られ、今日の御案内も、さうした意味から、起つた事で、侯爵も、特に、貴下の御参列下さる事を心待ちにして居るばかりでなく、木戸家に保存して在る、故人の書類を、すべて御覽に入れ度い、といふて居られ

る位であるから、何とか、御繰合せを願ひ度いが、如何でありますか』
 これを聞いて、著者の心も、少し動いて來た。といふのは、木戸家の書類が、見られるといふ事は、此上も無い便宜であつて、此機會を逸しては、容易に出来る事でない、と、考へたから、何事を差措いても、行つて見たい氣になつた。

元來、來原といふ人は、其當時、鐵道省の役人であつたが、伊藤博文公の師、來原良藏の血族の一人で、良藏は、孝允先生の妹婿である、といふ關係から、著者が、木戸先生の講演をして居る時に、環助氏が、偶然、訪ねて來て、それから親しくなつたのである。極めて溫厚な人物で、故人の事に就ては、種々、話も爲て呉れた所から、環助氏に對しては、深い敬意を有つて居たのである。斯うした人から、勧められてみると、只それだけの事でも、行つて見たい氣の起るのは、當然であつた。

そこで、著者は、木戸邸へ行つて、侯爵にも、御目に掛り、御焼香も濟ませて、それから、陳列されて在る、書類の總てを拜見した。

其中で、最も著者の興味を唆つたものは、故人が中島三郎助の家に、修業をして居た時、元の師、松陰先生へ送りし、一通の書面であつた。尤も、それは草稿であるが、其書面の中に、斯ういふ事が、書いて在つた。

『自分が、今、修業して居る室は、頗る狭く、二疊敷の一室であるが、すぐ隣が物置であつて、干物が多く置かれて在る爲に、臭氣が甚だしいので、此一事には、頗る弱つて居る』

と、いふ意味の事が、書いてあつたのを見て、故人も、随分苦しい修業を、爲て居たのである、といふ事が、解つた。

中島は、相州浦賀の奉行手附の與力で、今の事にすれば、警部ぐらゐの資格であるが、此人は、中々の人物で、その交友としては、藤田東湖、江川太郎右衛門、武田耕雲齋等の人が、數へられた丈けでも、其爲人が思はれる。殊に

徳川の天下が、愈々覆へらうとした時、榎本釜次郎、大島圭介等と共に、函館の五稜廓に立籠り、花々しい戦ひをして、その長子と共に、枕を並べて、討死したのであるが、木戸先生は、其門生として、教を受ける爲に浦賀に居た、其當時の手紙であつたから、少なからぬ興味を惹いたのである。

又、故人が、藩侯へ上つた、國防に關する、建白書の寫しも見た。それには、

『大藩大夫父子か、親ら陣頭に起つて、討死する覺悟で、大に戦ふべし』

と、いふ意味の事が、非常に強い言葉を以て、書いてあつた。その當時、故人の歳は、漸く二十二で、身分も卑く藩侯に對して、斯うした上言を爲るやうな、資格は無かつたのであるが、それにも拘らず、『討死する迄戦へ』などと言圖がましい事を言ふたのは、實に驚くべき事柄で、其頃の事として、考へてみると、普通の武士として、容易に言へる事ではなかつた。それを押切つて言ふた處に、故人の偉い點は、現れて居ると思つた。

薩長聯盟の成立した、當時の事情を、巨細に書いた、草稿も見したが、それを讀むと、今迄の歴史や、著者の傳へて居た、聯盟成立の事情が、すべて覆へされて、重大な誤のあつた事を、發見し得たのである。

其點に就ては、薩長聯盟の經緯を述べる時に、詳しく語る事として、今は省略するが、是迄に傳へた、著者の物語は、改めて訂正せねばならぬ事になつた。

夫人松子へ送つた書面が、約三十通あまり在つたが、それを讀んでみると、恰て、長上の婦人へ送る、書面に等しく、藝妓上りの妻に送る、書面としては、餘りに丁寧過ぎる位であつたが、そこに、故人の人格の一端は、判然、現はれて居た。又、養子の正次郎へ、送つた手紙には、難解の文字に、すべて振假字が、附けてあつたのを見て、故人の心の優しさが、偲ばれた。

環助氏から、無理に誘はれて、木戸邸へ行つた事は、斯うした收穫に依つて、著者の爲には、非常な利益であつた事を思つて、今でも、その親切に、感じて居る次第である。

二

薩藩から、西郷と大久保が出て、長州藩からは、木戸が出た。而して、此三人の力で、幕末の難關を、見事に切抜

け、明治の新天地を、拓いたのであるから、その功績は、實に偉大なものであつた。

乍併、三雄は、藩の關係が異ふ丈けに、一身の立場も、全く相違して居たから、時としては、利害の一致せぬ點もあつて、可成り、難しい關係ではあつたが、結局は、徳川幕府を倒す、といふ點に於て、一致を見たのであつた。

三雄を、一個の人として見れば、三人乍ら、其性格も異り、それ／＼に、特長が異つて居たから、其對照は、頗る面白いものであつた。

木戸は、其時代の武士に有勝な、武張つた事や、理窟張つた事ばかりでなく、粹な浮名を誣はれて、京洛の花柳界にも出沒した。さうした苦勞人としての逸話も、相當に多く、此點では、西郷と大久保に、見られぬ妙味があり、兎に角硬軟両面にかけて、豊富な話の種を残して居る。

木戸は、齋藤彌九郎の門人として、劍術に於ても、一方の雄者であつたが、遂に一人の生命を殺らず、三尺の秋水を閃めかした事は、只の一度もなかつた、といふ事であるから、此一事丈けから考へても、普通ならぬ人物であつた事は解る。

那の殺伐な時代に、幾度か、劍戟の間を出入しながら、巧みに危きを遁れて、其腕前を、現さずに終つた、といふ事は、實に面白い事である。

或時は、會津藩の武士に押へられて、藩邸へ伴れて行かれやう、とした事があつた。勿論、十數名の藩士に取巻かれたのであるから、如何に、劍術の達人でも、之れを切抜ける事は、容易な事ではなかつたらう。假に、切抜け得ら

れるとしても、それは、無益の殺生に過ぎないのであつて、木戸の如き、大志ある人物が、爲すべき事ではなかつた。

四條繩手を、やつて來ると、加茂川に臨んだ所に、少しばかりの空地があつて、磧を流れる、水の光りが、目につした。

『甚だ恐縮で御座るが、一寸、用達を致し度いが、御許し下さい』

『用達なら、藩邸まで來れば、ゆつくり出来るのであるから、忍耐したら可からう』

『イヤ、それ迄に、忍耐の出來ぬ程、苦しんで居るのであるから、どうか御許し下さい』

藩士の連中も、外の事と異つて、大小便を爲したい、といふのに、『それは不可』とも言へず、澁々、用達を、させる事になつた。

そこで、木戸は、空地の西側、加茂川に臨んだ崖端に立ち乍ら、先づ袴を脱いで、衣物の裾をまくり、悠々と、踏み込んだ。

之れを見た連中は、顔を外向けて、その用事を済ますのを、待つて居たが、木戸は、其隙を見て、磧へ、ひらりと飛下り、小砂利を蹴立て、一目散に駈出した。

藩士達は、周章ふためいて、後から逐掛けたけれど、到頭、取逃してしまつた。

『何といふ、逃足の早い奴か』

『何しろ、我々は、駈出す支度が爲てないのだから、一足早く逃げられては、如何とも、する事が出来ない』

『その通りだ』

『それにしても、残念な次第ぢや』

各自に、愚痴を言ひ乍ら、引取つてしまつた。

大便をする振をして、尻捲りの儘で駈出した、木戸の姿は、あまり見よいものではなかつたらうが、逃足の早い事では、其後の事に徴しても、想像される位に、頗る早いものであつた。食逃といふ事は、世間に有がちの事だが、垂逃は、木戸の發明と言つて可からう。

大久保に就ても、それと、同じやうな逸話がある。

丁度、京都の薩邸に、勤めて居た時、未だ市藏と言つて居た時代であるが、一日、三條通りを、ブラ／＼やつて來ると、向ふから三人伴の武士が、やつて來た。その容子から見ると、いづれも、浪人らしい風體で、各々一杯機嫌の威勢よく、何事か、高聲に語り乍ら、やつて來たのであつた。

大久保と、摺違ふ途端、どういふ機みであつたか、帶して居た、大刀の鐙が、浪人の腰に當つたので、何か事あれかしと、酒の勢ひで、往來を濶歩して居た奴等であるから、堪らない。すぐに喧嘩を賣つて來た。

『待てッ』

と、大喝されたので、大久保は、足を停めて振返つた。

『御用で御座るか』

『お、用があるから、呼んだのだ。見受ける處、大小を帶して居る以上、武士に相違あるまいが、刀の鐙を拙者の身體に當て乍ら、挨拶もなく、行過ぎようとするのは、無禮千萬だ』

『お咎に預つて、何とも恐縮致す。意外な失禮を致して、申譯がない。改めて御詫を致すから、御許し下さい』

『イヤ、許す事は相成らぬ。御手前も、生きて居るからには、氣の付かぬ筈はないのだ。咎められてから、申譯では勘辨相成らぬ』

と言ひ乍ら、早くも、刀に反を打つて、チリ／＼と、詰寄せた。

大久保は、心の中で、奇怪千萬な、言懸りとは思つたが、斯うした奴等と、血を見る争ひは、無益の沙汰であるから、百万辯疏して、陳謝するほど、對手は、強くなるばかりであつた。

『これは又、迷惑千萬な、尊公方へ對して、反抗なぞ致す考へは、拙者に於て、毛頭御座らぬ、平に、御用捨を願ひ度い』

『イヤ、然うはならぬ。速かに立合をさつしやい。お手前も武士ならば、刀を抜く術ぐらゐ、心得て居らう。咎め立をされてから、彼是れ申譯をするのは、如何にも卑怯千萬、左様な腰拔武士を對手に、立合をするのも、刀の汚れと思ふが、武士の情に、打斬つて遣はす』

此一言には、流石の大久保も、堪へ兼ねて、
『然らば、どうあつても、御用捨下さらぬか』

『ならぬ』

『止む事を得ませぬ、お對手を致さう』

『さア來い』

三人で、左右から、チリ／＼、詰寄つて來た。羽織を脱ぎ捨て、下緒を取つて、襷十字に綾どり、刀の瑠をくつろげて、いざと言へば、直ちに切つて掛る、容子である。之れを見ながら、大久保は極めて沈着いて居た。浪人は、益々のばせ上つて、

『さア、早く勝負をせぬか、支度を何とする』

『まア、お待ちなさい。さう急かすとも、徐かに勝負いたす』

と、言ひ乍ら、悠々と、羽織を脱いで、やがて、それを袖疊みにして、懷中に入れたから、浪人は、之れを見て驚いた。最前から、薩摩者と見掛けしたが、成る程、薩摩の武士は、吝嗇だとは、聞いて居たが、今、果合をしようといふ

場合に、羽織を、懷中へ收ふには及ぶまい。如何にも、吝嗇な奴である、と思つて、蔑む心は、ますます深くなつた。

今度は、雪駄を叩いて、之れも懷中に入れた。オヤ／＼と思つて、見て居ると、大久保が、ぶツと、眞中の武士の顔に、痰を吐掛けた。額から鼻筋の處へ、痰が、ブラリと下つたから、呀と言つて、左の手で、押へる刹那、鋭ツと、氣合を掛けて、拔討に斬付けた。呀と叫んで、一人が倒れる。左の方の奴が、刀の柄に、手を掛けて、抜かうとする所を、横に拂つた一文字、腰軍に、サツと切込んだから、之れも倒れた。

一人の奴は、刀を抜合す暇もなく、踵を返して、ドン／＼逃げて行く。それを見ると、大久保は、血刀を下げた儘、反對の方へ、ドン／＼逃出した。兩方で逃げるのだから、是は、事もなく治つてしまつた。

此刹那の、大久保の動作は、實に素早いものであつた。今、命のやりとりをする、決闘の場合に、逆も、自分の腕前では、三人の武士を、對手にしては敵はぬ、といふので、横ツ面へ、痰を、吐き掛けるなぞは、實に面白い。

どんな人間でも、愈よ息を引取る迄は、汚ない事は嫌ひなのだから、況して、達者な奴が、痰を吐掛けたら、必ず顔を押へる。そこを拔討にやれば、斬れるだらう。オヤと思ふ所を、又一人斬るなぞは、全く面白い。死生の間に立つて、是れだけの頓智を有つ人は、臍ツ玉の据つたものでなければ、却々出来る事でない。

三

西郷は、一個の大人物として、同志の間は言ふ迄もなく、天下萬衆の輿望を、其一身に擔ふたが、之れを政治家として、見る時は、大久保と木戸に、遠く及ばなかつた。又、軍制上の事に就ては、多く津田出の説を聞いた。實戦家として、山縣、板垣に比較すれば、或は、一籌を輸したかも知れない。

然らば、どういふ點が、偉かつたのか、といふ段になると、判然、此點であると、答へる者は無からう。